

風変りな旅行者、自然環境保護者 チャールズ・ウォータトン

門 井 昭 夫

Charles Waterton : An Eccentric Traveller and Conservationist

KADOI Akio

抄 録

チャールズ・ウォータトン（1782-1865）はヨークシャーのウェイクフィールド近くに、無爵位の貴族の子として邸宅ウォルトン・ホールに生まれ、子供の頃から将来はナチュラリストと探検家になると思われる絶えざる好奇心と進取の気性を示した。

南米のギアナの内陸を1812-24年に4回にわたって探検旅行し、旅行中に体験し、観察したことをまとめて1825年に『南米漫遊記』として出版した。その内容はデメララ州の政治状況、自然景観、地形、住民、植物、動物（哺乳類、鳥類、爬虫類、昆虫）のほか、先住民の生活について詳しく書かれている。ウォータトンは他人の言説は信用せず、自らの目で綿密に、忍耐強く観察し、その結果に基づいて結論を導き出した。

ウォータトンはしばしば「奇人」とか「変り者」と言われるが、慣習とか大衆の臆病さには合わない大胆な行動をする偉大な紳士であった。

本稿ではまずウォータトンが如何なる奇人であったのかを若き日々の行動、信仰心に篤い生活を通して見る。次いでウォータトンは自然研究をどのように行ったかを『南米漫遊記』の記述を引用しながら具体的に検討する。さらに、後半生に力を注いだ自然環境保護の方法と態度について考察する。

キーワード：チャールズ・ウォータトン

『南米漫遊記』

博物学

ギアナ

はじめに

チャールズ・ウォータトン (Charles Waterton, 1782-1865) は奇人とか奇行の持ち主と言われ、風変りな旅行者として知られる。南米のギアナ (またはガイアナ) を4回探検旅行して『南米漫遊記』 (*Wanderings in South America*, 1825) を著したほか、『博物学小論集』 (*Essays on Natural History*, 2 vols., 1838-44) という著書もある。

イングランドはヨークシャーの貴族の家に生まれ、緑豊かで野生生物が多く生息する広大な屋敷で伸びやかに育った。そのため自然への探究心が強く、特に鳥類に対しては深い関心を抱いていた。『南米漫遊記』における動植物の観察は優れ、それまでに行われていた説の訂正を迫るものが含まれている。

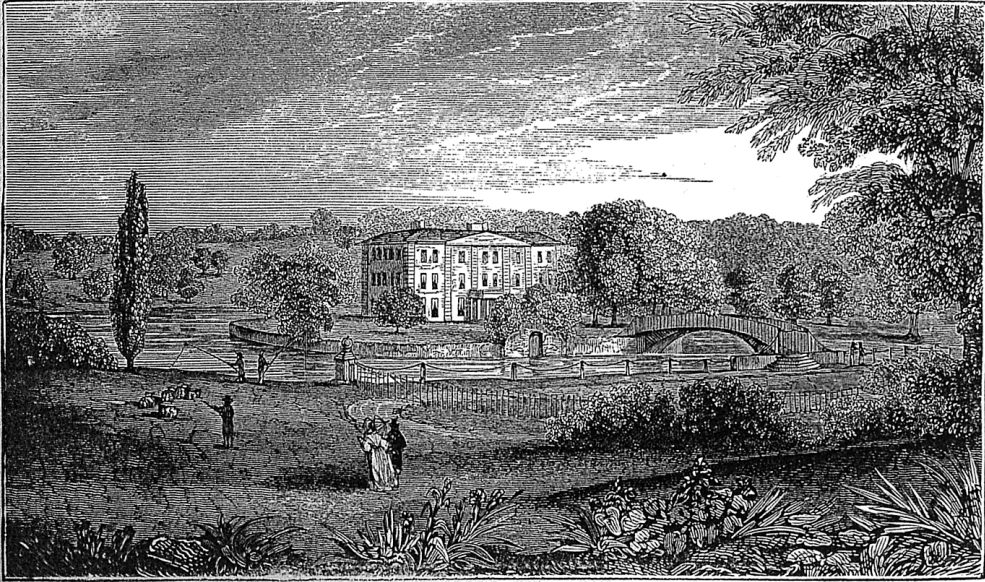
ウォータトンが奇人と言われるのはなぜか、どんな奇行を行ったのか。わが国では知る人の少ない、言わばこの自然人の人となり、その生涯を振り返ってみることで具体的にみる。また自然探索の内容、自然研究における業績については主として『南米漫遊記』に書かれたことを具体的に見て、ナチュラル・ヒストリー上の業績、また旅行家としての功績を考察してみたい。

1. 家柄と生い立ち

ヨークシャーのウェイクフィールド近くのウェスト・ライディング (West Riding) にあるウォータトン家の長子として、チャールズ・ウォータトンは邸宅ウォルトン・ホール (Walton Hall) で生まれた。ウォータトン家はイングランドで最も古い家柄で、爵位の無い貴族の一つであったが、ローマカトリック教会の信仰に固執したため、迫害を受け、宗教改革の際に財産の多くを没収されてしまった。ウォータトンが最も誇りにしていた祖先はトマス・モア卿であり、モアの所有していた時計がウォルトン・ホールの中央階段の上部の踊り場の名誉ある所に置かれていた。この時計は小さなもので、針は一本だけであるが、刻む時はいつも正確であった。

ウォータトンの先祖のレイナー (Reiner) はノルマンディー地方のノルマン家の息子で、1159年にウォータトン卿となったが、サクソン系の人であった。ウォータトンの家系は15世紀に男系が途絶えてしまったため、莫大な財産はウェルズ卿 (Lord Welles) の妻であり、彼女の兄ロバート・ウォータトン卿 (Sir Robert Waterton) の女性相続人であるセシリア (Cecilia) を経て、法定相続人であるセシリアの四人の娘に譲渡された。

ウォルトン (Walton) はポンテフラクト大領地 (Honour of Pontefract) の一部を形成しており、ポンテフラクト大領地の領主はエドワード懺悔王 (在位 1042-66) の時代、ノルマン人征服後のウィリアム王 (在位 1066-87) の時代、またその後いろいろと変った。ウォルトンとコーソーン (Cawthorne) は7代にわたってドゥ・バーク家が所有していたが、ジョン・ドゥ・バーク卿 (Sir John de Burgh) の女性共同法定相続人によってウィリアム・アシェンハル卿 (Sir William Ashenhull) に譲渡され、さらに



堀の石島上に建つウォルトン・ホール 中央に古い門の遺構が、右手に鑄鉄製の橋が見える。
ウォータトン著『博物学小論集』(Essays on Natural History, 1838-44) 第1巻より。

その女性法定相続人によって1435年にジョン・ウォータトンに譲渡された。

ジョン・ウォータトン卿は1401年にリンカーンの州長官になり、百年戦争中にフランス北部のアジャンクール (Agincourt) でヘンリー五世の軍隊がフランス軍を破った時 (1415) には、近衛騎兵隊長であった。兄のロバート卿はリチャード二世がポンテフラクト城に幽閉されている間、城の司令官であり、ヘンリー四世の近衛騎兵隊長を務めた。ジョン・ウォータトンはいウィリアム・アシェンハル卿の女性法定相続人と結婚し、ウォルトンとコーソンの領主となったのである。

チャールズ・ウォータトンはこの由緒ある家の代表として財産を受け継いだ。ウィリアム・ウォータトン卿の次男リチャードの子孫である。こうしてチャールズ・ウォータトンは第27代の領主となったが、その領主権を得たジョン・ウォータトンから数えると16代目となる。

チャールズ・ウォータトンの生家であるウォルトン・ホールは比類ない創造物であったが、その建築については、ウォータトンの伝記を書いたウッド (J. G. Wood) は次のように酷評する¹⁾。ウッドはウォータトンと交わり、その最期を知っている人であるが、ウォルトン・ホールは「建物それ自体としては、如何なる金銭的支出をしても美しいとか豪壮であるという主張は少しも出来ないようなものであった。この邸宅は建築史上最悪の時代の最悪の見本の一つであり、窓が列をなして長方形の穴となっている石の箱にしかすぎない」と手厳しい。ウッドはこの建物の醜さを和らげるにはどの面から見ればよいかと、すべての面を試したが、うまく行かなかったとし、「建物の正面は、不思議なことに、最悪の部分で、平らで滑らかな石の壁であり、長方形の窓が3列あって、最下の列には8つの窓がある」と続け、「この点で匹敵するのは同じ時代の救貧院である

が、近代の救貧院は建築の効果においてははるかに勝る」と言う。

ウォータトンは10歳でダラム近くのタドウ (Tudhoe) の私立小学校に学び、14歳の時にイエズス会によって設立されたストーンハースト (Stonyhurst) 校の最初の生徒の一人となった。彼は幼い頃から将来はナチュラルリストと探検家になる絶えざる好奇心と進取の気性とを示した。このために学校の近くの森で野生生物を研究しようと境界を越えて入り、大変な面倒を起こした。困った教師たちは彼を学校のネズミ捕りとキツネ狩りの係にするという妙案を思いついた。その結果、ウォータトンは校則を破ることなく、自分の興味あることを追求することができた。

ウォータトンは趣味の野生生物研究を続けるのと同じくらい熱心に古典の勉強をしたと思われる。これは『南米漫遊記』に古典への言及が少なからずあり、ラテン語の陳腐な文句が頻繁に見られることから明らかなことである。

2. スペインへの最初の外国旅行

ストーンハースト校を18歳で卒業して、ウォータトンはこの上なく幸福なことに自宅のウォルトン・ホールと大庭園のウォルトン・パークを隈なく探索して一年を過ごした。その後に最初の外国旅行に出発した。1802年にアミアンの講和条約がイギリスとフランスの間に結ばれ、スペインおよびオランダも関わりがあったところから、ウォータトンの訪れる国としてスペインが選ばれた。初めしばらくの間、スペイン最南部のアンダルシア地方のカディスに滞在してから、マラガに船で渡る途中、ジブラルタルに寄り、有名な類人猿を見る幸運に恵まれた。当時ジブラルタルは野生の類人猿が生息しているヨーロッパ最後の地であった。ウォータトンはジブラルタルで類人猿の研究を行い、その起源に関して、類人猿は元からアフリカに棲んでいたという考えを小論の一つとして発表した。類人猿がどうしてジブラルタルにいるのか、誰も知らない時代であった。

スペインでは南部の港市マラガに住む二人の叔父の所に一年以上滞在し、スペイン語を学んだ。この間、マラガには黒吐病 (黄熱病と同じ病気) と呼ばれる恐ろしい疫病が発生し、同時にコレラも発生して住民は何千という単位で死んだ。マラガからは5万人が脱出したにも拘らず、1万4,000人も死者を数えた。ウォータトンの叔父の一人はこの疫病で亡くなった。ウォータトンもこの疫病で倒れたが回復し、残った叔父に伴われて弟と共にスウェーデン船でマラガから脱出しようと図ったが、これは船旅に関して定められた禁止令に違反するもので、破れば終身投獄という危険を冒してのものであった。叔父は二人を連れて帰ることを拒んだ。しかし、大胆なスウェーデン人船長の深謀遠慮によって兄弟二人はうまく脱出することができた。船長はウォータトンをスウェーデン人大工、弟は一乗客として乗船者名簿に記載したのであった。

ウォータトンの体質は強健であったが、疫病に罹って変調をきたした。イギリスに帰る航海中に肺に及ぶ風邪を引いた。医師は暖地への転地を勧め、父親は息子を1804年に、南米の英領ギアナのデメララ州に所有していたサトウキビ農園の監督者として、送

り出すことにした。これがウォータトンと南米のギアナとの関係の始まりである。

3. 南米のギアナへの転地とその後

出発前にウォータトンはジョゼフ・バンクス卿 (Sir Joseph Banks) を訪ねた。バンクスは当時王立協会の会長を務める有名なナチュラリスト、探検家であった。ウォータトンはバンクスとは以前から知り合いであり、後に出版される『南米漫遊記』の初版の序文ではバンクスに対して謝辞を述べている。バンクスは、ウォータトンの少年時代のイエズス会の教師のように、ナチュラリストとしてのウォータトンの潜在的な可能性に心を打たれ、少なくとも3年に一度はイギリスに帰ってくるのを忘れないようにすることを忠告した。おそらくバンクスは、そうすることがウォータトンに標本の収集を行う気にさせる、と考えたのであろう。

ウォータトンは初めの8年間は農園の監督で忙しく、ナチュラル・ヒストリーの研究をする時間的余裕はほとんど無かった。もっとも、数多くの旅と冒険に出掛ける都合はつけ、その幾つかについては著書『博物学小論集』に述べられている。

1812年に父が、また農園で一緒に働いていた叔父が亡くなり、ウォータトンは農園を他の経営者に譲り渡して初めて生まれつき好きであったことをする自由を得た。家を相続するためにイングランドに戻り、この時からウォータトンは地元では「大地主」(the Squire) の名で知られるようになった。1812年の末にギアナの内陸への最初の旅行に出発した。第2回目は1816年から1817年にかけて、第3回目は1820年に行われ、その間の休止期間は大概ウォルトン・ホールかヨーロッパ大陸で過ごした。イングランドで3年間過ごした後、1824年の第4回目の旅行では初めてアメリカ合衆国とカナダに行き、それから西インド諸島に回って再びギアナのデメララを訪れた。

1824年の12月末に帰国し、旅行中にまとめていた『南米漫遊記』を翌年に出版した。さらに探索するためにウォータトンはギアナに戻るつもりでいたが、1829年にチャールズ・エドマンスタン (Charles Edmonstone) の娘アン・メアリー (Anne Mary Edmonstone) と結婚することになった。この時、ウォータトンは48歳、花嫁はわずかに17歳であった。1812年にウォータトンはデメララにあるアン・メアリーの父の家で赤ん坊であった彼女に初めて会い、いつの日か彼女と結婚すると心に決めたという。エドマンスタン家は後にスコットランドに帰り、王家の血を引く祖先の一人の寡婦産 (dower: 夫の遺した不動産の3分の1を寡婦は享有する権利があった) の一部をなす旧家の屋敷カードロス・パーク (Cardross Park) を取得した。

チャールズ・エドマンスタンが亡くなり、またインドのミンダ王妃 (Princess Minda) の娘である妻ヘレンも亡くなり、娘イライザ、アン・メアリー、ヘレンの3人は教育を終える目的でベルギーの有名なブルージュ女子修道院に送り出された。結婚式はこの女子修道院の礼拝堂で行われた。しかし、このロマンスは一年も経たぬうちに悲劇的結末を迎える。アン・メアリーが男児を出産する際の産褥熱で亡くなってしまったのである。

ウォータンは妻について語ることに耐えられなかったが、自分のなすべき第一の務めは小さな息子を育てることだと考えた。アン・メアリーの姉妹イライザとヘレンが家事を行うためにウォルトン・ホールに移ってき、ウォータンが1865年に83歳で亡くなるまで留まった。彼は南米への憧れを持ち続け、南米について考え、多くのことを書いたが、再び南米に戻ることはなく、生涯の最後の40年間はその創作エネルギーの大部分を自宅の大庭園ウォルトン・パークの自然環境保護に注いだ。

4. ウォルトン・パークの自然環境保護

ウォータンがナチュラルリストとして関心を抱いていた主な対象は鳥類であったが、他の生物にも、たとえそれが見栄えのしない貧弱なものであっても、愛情を持って接した。しかし、アナグマと大型のキツネだけはウォルトン・パークから除外した。というのは、ウォルトン・パークをイギリス最初の人工バード・サンクチュアリーに変えることにウォータンは着手したからである。これはおそらくイギリス産の鳥だけではなく、ウォータンが新世界から持ち帰った鳥にとっても最初の保護地であったろう。

ウォータンは土地を鳥が利用しやすいように改造し、自分自身の慰めよりは鳥の慰めになるように多大の関心を払った。水鳥を受け入れるためには大きな堀と連続した池があり、鳥が採餌できる湿地があった。また鳥が営巣場所として選べる大きな建物の廃墟があった。ウォルトン・パーク全体は堂々たる樹木で覆われていた。さらに、邸宅は堀の中の石島の上に建っており、水鳥の習性が細かく観察できた。

鳥類の保護に必要なことは、当然ながら、少年たちや他の不法侵入者によって鳥の生活が妨げられないようにすることであり、周辺での発砲を禁止することであった。鉄砲の音は鳥が本能的に恐れると思われる唯一の音であった。しかし、邸宅の前には狭い公道があり、この道を閉鎖する許可を得るには大変な困難があった。けれども、最終的にはこの目的は達せられ、ウォータンはここに石塀を建て始めた。この石塀はほぼ円形をなし、全長は3マイル、259エーカーの面積を囲むものであった。邸宅はその中心近くにあった。石塀の高さはどこも8フィート以上あり、近くの運河に面した部分の高さは2倍の16フィートあった。それは悪名高いはしけの船頭の鉄砲から鳥を護るために必要な高さであった。船頭たちは大胆不敵な密猟者であり、たとえ見つかって追いかけても自分たちのはしけに乗って逃げるのができた。

このような石塀の建築工事は必然的に多額の資金を必要とし、少なくとも1万ポンドは掛った。ウォータンはそのような大金を一度に払うことはできなかったが、借金はしなかった。そこで、石塀建築のために割けるだけの金額をとっておき、その資金が費されるまで工事を行い、資金が無くなると工事を中断し、翌年また資金の用意ができると工事を再開したのであった。

ウォータンは非常に心が優しく、当時他の地主の間で普通に行われていた厳しい手段を密猟者に対してとることができなかった。そこで、密猟者の気をそぐために石塀に加えて他の手段を考えた。それは例えばヒイラギを促成栽培するという方法であった。

その結果、人のほとんど入り込めない茂みを比較的短期間のうちに数多く作ることができ、鳥はわりあい安全な所に隠れることができた。これらの「ヒイラギの砦」の一つは特にキジのために考案されたものであった。この「砦」には狭い開口部が一つあって、南京錠をかけた高い木戸に閉ざされていた。密猟者を道に迷わせるために、ウォータトンは木で彫った模造のキジを囲い地の外側の木々に釘で打ちつけておいた。

明らかに、このような方法はウォータトンの保護する鳥に大きな安心感を与えた。というのは、ウォルトン・ホールの訪問者の多くがこの鳥は人に馴れている、と言っていたからである。これはサギについても言えることであり、高い石塀が完成すると直ぐにサギはその背後に定着したのであった。ウォルトン・パークのサギの群生繁殖地では1863年にはほぼ40の巣が数えられ、サギに警戒心を起こさせずに近づくことができたという。

ウォータトンは大好きな鳥のためになるように屋敷の自然の特徴の全てを最大限に利用した。例えば、池の縁の湿地が干上がらないように気をつけた。またショウドウツバメの巣穴用に人工の石切り場を造るなど、自然の特徴を自分で導入することも行った。ウォータトンは大庭園の周辺に散在していた幾つかの廃墟をも利用した。これらのうちで最も重要なのは世評では1千年前の元の建物の古い門構えの遺構であり、そのオークの扉にはオリヴァー・クロムウェルの率いる包囲軍によって銃眼があげられ、弾痕が残っていた。中央塔と両脇に側面小塔があるこの門構えの遺構は厚いツタに覆われ、大量の鳥が営巣していた。背面の陸側は、密生したイチイの生垣でその地域を囲み、鳥にさらなる隠れ場を提供した。

この囲い地の中にウォータトンは巧みなデザイン「ホシムクドリの塔」を建てた。この塔は平たい石柱の上に載る円筒状の巣からなり、その上部は円錐形をしており、ネズミや、ウォータトンが大量に飼っていたネコの略奪行為にあうことを免れた。

ウォータトンは鳥と同じくらい樹木に魅せられ、ウォルトン・パークの樹木のそれぞれについて精通していた。忍耐強く研究して個々の木の長所、弱点、木の必要とするものは何かを知るようになった。木が病気にかかれば、わが子のように大いに気を配って手当てをした。若木については、それぞれの木がどんな種類の土壌を好むかを正確に知っていた。

子供の頃からウォータトンは木登りが好きで、樹頂で多くの時間を過ごし、鳥を観察したりホラティウスやウェルギリウスを読んだりした。ウォルトン・パークを訪れる人は、タカの巣や庭園の新しいレイアウトを見せてもらうには、ウォータトンの後に続いて木に登る覚悟をしなければならなかった。ウォータトンは生涯木登りを続け、83歳で亡くなる直前に大庭園の最も高い木の一つに登りさえた。

5. 信仰心篤く、規則正しかった生活

『南米漫遊記』が初めて出版されたとき、批評家の一人がウォータトンを「変り者」(an 'eccentric') と呼んだので、彼は大いに困惑した。ギアナの奥地に身の危険をも

顧みずに探検旅行したこと、とりわけカイマン（中南米熱帯産のワニ）の背にまたがり、ワニの口にロープを入れて原住民に引かせたことなどを指して変り者と評したのであろうが、ウォータトンにはそうした行動が奇行であるという意識は全くなかった。（『南米漫遊記』の内容については後述する。）

ウォータトンが風変わりとか奇人と言われることについて、エディス・シットウェルは「ウォータトンが奇人であったのは偉大な紳士はすべて奇人であるという意味においてだけ」であり、「それは偉大な紳士の動作は生まれつき慣習とか、大衆の臆病さに合うようにはなっていないという意味である」と言っている²⁾。Eccentric の原義は「円の中心を外れた」であるが、シットウェルの定義は多分にこの原義を踏まえたものであり、ただの奇人であると言うよりは「第一級の奇人」（‘a first-rate eccentric’³⁾）と言うほうが当を得ていよう。日本語で言う「奇人」「変人」とはニュアンスが異なる。

ウォータトンは普通の人と同じようには生活することも、行動することもなかった。彼の生活は当時のイギリスの地方の普通の大地主のそれではなかった。彼の個室は家の階段を上らなければならない最上階にあった。部屋にはベッドもカーペットも無く、彼はむき出しの床の上に毛布にくるまって寝た。妻の死後、ベッドに寝なかった訳は若妻が産褥熱で亡くなったことに対する贖罪行為であったとされる⁴⁾。枕はオークの角材であった。夜は8時に寝て、翌朝は3時に起きたが、それは特大のコーチシナ（元インドシナ南部の地域）産の若い雄鶏が時を作るのを聞くと直ぐに起きたのであった。この雄鶏が鳴くのをウォータトンは「朝の大砲」と呼んだ。それから彼は寝室の隣にある専用の礼拝室に4時までに入り、1時間お祈りをした。

これら全ての行為が風変わりであり、厳しい克己心と信心深さの大いなる証拠でもあった。信仰そして自然に対する態度だけでなく、他人に対する振舞いにおいてもウォータトンは非常に信仰の篤い人であったということは記憶されるべきである。例えば、J. G. ウッドはウォータトンの伝記の中で、彼はけっして金持ちではなかったが、多くの慈善事業に物惜しみせず匿名で寄付をしたことを記している⁵⁾。

大きな屋敷に若くして住むことになり、1時間たりとも1シリングたりとも無駄にすることなしに極めて高齢になるまで生きた、という点では人と変っていた。また、ある人たちは、ウォータトンの根強い喪服嫌いは風変わりである、と考えた。しかし、この風変りな好みは他にも共有する人がいて、黒いクレープ、黒い手袋、帽子に巻く黒い喪章の着用、黒緑の書簡用紙などの使用は主義として行わない人は数多い。ウォータトンは通常、ブルーの長上着を着ており、そのボタンはめっきではない金ボタンであった。しかし、その高価なボタンは警察にとっては防犯上の絶えざる心配の種であった。警察のたつての要請を受けてウォータトンは、自宅にいる時以外は、金ボタンははずしておくことに最終的に同意し、ボタンに青い布をかぶせてもらうことにした。

この奇人ぶりはある時、ローマ教皇（グレゴリオ十六世）に謁見する名誉を失わせる原因となった。教皇に謁見を許された人は礼法上、もしも制服を着用しない場合には、普通の夜会服を着なければならなかった。ウォータトンは、州副総官と資格付けられて

いたのであれば、普通の習慣に従い、その制服を着たことであろう。しかし、彼はそうすることを拒んだので、唯一の代案は夜会服を着ることであったが、頑として燕尾服を着ることはせず、ついに謁見の機会は失われたのであった。

6. 『南米漫遊記』

ウォータトンが4回にわたってギアナを訪れ、3回までの旅行ではデメララ川を遡り、熱帯雨林の中を探検旅行し、旅行中に体験し観察したことをまとめたのが1825年に出版された『南米漫遊記』であった。その内容はデメララの政治状況に始まり、自然景観、地形、先住民、植物、動物（哺乳類、鳥類、爬虫類、昆虫）のほか、先住民の生活、とりわけ彼らが狩猟に用いる吹き矢に塗るウラーリ毒については、その効力を確かめるために数回の実験を行って真実を極めようとし、先住民の体験談に耳を傾けもした。

動物ではナマケモノについて細かく観察し、それまで通説であった博物学上の誤りを正した。

ナマケモノはけっして生きているものを傷つけることはなかった。数枚の葉、それもごく普通の粗い類の葉が、ナマケモノが食糧として求める全てである。ナマケモノを他の動物と比べると、体の構造に欠陥、変形、過剰のものがあると言えよう。ナマケモノには物を切り裂く歯が無く、胃は四つあるが、反芻動物の持つ長い腸は依然として欠けている。…足には底の部分が無く、足指（に相当する部分）を個々に動かす能力も無い。ナマケモノの毛は平べったく伸びた感じで、冬の突風にしおれてしまった草を思わせる。脚は非常に短く、胴体につながっていて変形しているように見える。地上にいる時には、脚は木に登るためにのみ造られているかのようだ。（p. 93. 引用文のページ数は J. G. Wood, ed., *Waterton's Wanderings in South America* による。）

ウォータトンは人のほとんど住んでいない所を探検する際は、哺乳類や爬虫類を捕えて食用にした。アカホエザルについては「誤ってヒビ（baboon）と呼ばれるが、姿が見えるよりもしばしば声が聞える」と記し、その肉を食べたことが何度か記述されている。「一方、オマキザルやリスザルは木から木へと渡り、旅をしている外来者を楽しませる。…ケナガイタチの一種とキツネの一種は先住民の家禽にとって有害である。これに対してオボッサム、イグアナ、テグートカゲは美味しいご馳走となる。」（p. 7）

デメララは驚くほど美しい鳥を産することで世界のどの国にも劣らないとし、生き生きとした美しい色で飾られた珍しい鳥にここでは出会えるが、そういう優美な鳥を見出せるのは根気強いナチュラルリストだけである、とウォータトンは言う。

ショウジョウトキはポマウロンの海岸の泥土の島で無数と言えるくらい大量に繁殖する。シラサギとヒロハシサギも同じ所で繁殖する。これらの鳥は干潮の時には干潟で大挙して行き、その一方では何千というシギとチドリがここかしこにヘラサギやフラミンゴと一緒に、シラサギとヒロハシサギの中に見えるのが見られる。ペリカンは沖の方に行くが、夕暮れにはヒルギダマシに帰ってくる。ハチドリはこの属の

それぞれの種が採餌するのを常とする花の近くでおもに見られる。(p.94)

デメララ川を遡りながら鳥の声を聞いてのウォータトンの記述は臨場感に富む。この一節は特に音の描写に優れているので、次に引用する。

未開の自然の持つ様々な美しいものを見分けられる目を持ち、また森林の中の自然のままの音に閉ざされていない耳を持った人はデメララ川を遡るのを喜ぶであろう。時々、オオシギダチョウが森の奥から悲しげな声で長くピーピーと鳴いては休止する。一方、オオハシは鋭い声で鳴き、オオシギダチョウの鳴き声が止んでいる間に、カザリドリと呼ばれる鳥の甲高い声が聞える。スズドリは旅行者の注意を必ず引く。ほぼ3マイル離れた所から、この雪のように白い鳥が4,5分ごとに、遠くの修道院の鐘のような声で鳴くのが聞える。朝の6時から9時、森林では鳥類の混ざり合った鳴き声とさえずりがこだまし、その後は次第に聞えなくなる。11時から3時までは、辺りは全て夜中の静寂の中にいるように静かになり、スズドリとカザリドリの鳴き声を除き、鳥の声はほとんど聞えない。太陽の熱さに押されて森林の茂みに引き下がっていた鳥が、ふたたび元気を取り戻す夕方の涼しさを待つのはこの時である。(p.97)

ウォータトンの好んだ鳥については上記のほか、優美な羽冠を持つイワドリ、コンゴウインコ、オオハシ、コンドル、フクロウ、タイヨウチョウ、イカル、フウキンチョウ、キツキなど、多種の鳥が観察されている。

植物については大きな樹木に関する記述が目立つ。広範囲にわたって森で覆われるこの国では、多くの所で熱帯の太陽と豊富なカビが植物の生長にあらゆる利点を与える。したがって、ウォータトンが非常に大きな樹木を探そうとするのは自然なことである。「しかし、幹周りが6ヤード以上の木に出会うことは稀である。もしも、もっと大きなものがこれまでに存在したとしても、切り倒されるか山火事の犠牲になってしまった」と幹の太い樹木にめぐり合えないことを述べる。しかし「太さでは落胆させるとしても、高さでは樹木は十分に埋合せをしてくれる」として、そびえ立つような巨木の一つモラの特徴を紹介する。「モラを見るために止まることなく旅行できる人は不注意か、あるいは一切の好奇心に欠ける人に違いない。その天辺の枝は年を経て葉が無い事故で乾燥してしまうと、鳥のオオハシのよく行く大好きな所となる。」(p.90)

ウォータトンは巨木モラに寄生する植物との関係を興味深く描写する。モラの天辺の太い枝から、しばしば野生のイチジクの木が育つ。そして実が熟すと鳥がその実を食べにやってくる、消化されずに鳥の体を通じたイチジクの種子がモラの高い所にイチジクを生長させる。モラの樹液が種子を完全に結実させるのである。さらに鳥はつる植物の種子をもイチジクの木に残し、これらの種子は直ぐに生長し、大量の実を結ぶ。「つる植物がイチジクの資源を奪い取るやらイチジクの木がモラの資源を奪い取るやらで、モラは自然が全く意図しなかった受託物を支えることができず、その負担で弱り、枯死してしまう。するとイチジクとつる植物の強奪性の子孫はもはや育ての親から助けを得られず、今度は自分が枯れてしまう。」(p.91)

ウォータトンは自然の地形、景観の描写をしばしば行うが、1812年の第一回旅行でジョージ・タウンからデメララ川を舟で遡って行く際の大滝の描写は細部にまで及んでいて迫真的である。

大滝に到る数マイル手前の所で、小さな泡の塊が川面に浮いて流れて行く。この大滝は実際に滝と呼べる唯一のものである。川は泡の縞の美しい跡がついているように見え、もっと近づくと流れは一帯に白くなっている。最初は滝がものすごい音を立てて岩盤を勢いよく流れ落ちているのが見え、それが泡立った二つの流れに分かれ、また一つに合わさった所で木の生えた小島を造っている。この小島の上方に、わずかな空間があり、そこから一つの流れだけが見え、泡で全体が白くなり、流れを妨げる巨大な岩の間で波立ち、逆巻いている。(pp. 102 f.)

「大滝のより高い所では短い1, 2本の水路に分かれ、岩の上には水路を分けた樹木が生長している。あちこちにある奔流は岩の中に深く食い込み、岩を他の岩にぶつけることで大きな断片に分割する。岩上の木には花が咲き、生き生きとしているが、根は半分露出し、その多くは勢いよく流れる水に傷つけられ、折れてしまっている。」(p. 103)

ウォータトンは川の水位の低い所から見た滝全体の様子をこのように描写するが、これは雨季の間のことで、乾季には滝はまた非常に違った外観を呈するであろうと言う。

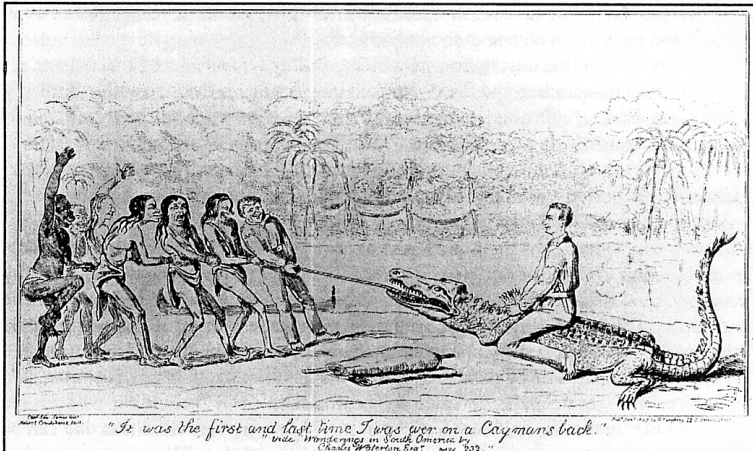
1820年の第3回の旅行中にカイマン(ワニ)を生け捕りにし、ウォータトンがその背にまたがった話は批評家はその無謀振りを嘲笑した。このことは後に画に描かれるほど有名な場面(次ページの図参照)なので、少し長くなるが引用する。

人々がカイマンを水面に引っ張り上げた。カイマンは水面近くに上がってくるや否や猛烈な勢いで水中に突っ込み、人々がロープを緩めると、また水中深く潜ってしまった。このカイマンを一見しただけで、惚れ込むほど十分には見ていなかった。…人々がまたロープを引っ張ると、カイマンは水面に出てきた。これは興味深い瞬間であった。ワニをじっと見据えて私はしっかりと身構えていた。

この時までにはカイマンは私から2ヤード以内の所にいた。カイマンが恐怖と動揺の状態にいることがわかった。直ぐに私は握っていたマストを手放し、飛び跳ねてカイマンの背に飛び乗り、手をつきながら半分体を回した結果、顔を正面に向けてきちんと座ることができた。私はたちまちワニの前足をつかみ、渾身の力で背の方にねじり上げた。ワニの前足は馬鞍ばろくの代りとして役立った。

カイマンは今や驚いた状態から立ち直ったように見え、おそらく敵意を持って見ているのであろう、怒り狂ったように急に動き始め、長くて力のある尾で砂を激しく叩いた。私はワニの頭近くにいたので、ワニの打撃は届かなかった。ワニは跳ねて尾を打ち続け、私の座り心地を非常に悪くした。これは手持ち無沙汰の見物人にとっては面白い見ものであったに違いない。

人々は勝ち誇って叫び声を上げ、騒々しかったので、彼らに私と私の乗ったワニをもっと陸地の方へ引っ張るように、と言うのが聞えるまでには少し間があった。私はロープが切れたら、カイマンと共に水中に沈んでしまう危険が十分にあったら



カイマンにまたがるウォータトン クルックシャンの描いた漫画 (Wakefield MDC. Museum and Arts). Brian Edginton, Charles Waterton: A Biography (1996) より。

うと心配した。(pp. 274 f.)

入江に餌を仕掛けておき、カイマンが餌を飲み込んだら容易に逃れられないようにしておき、長時間待った末にようやく生け捕りにしたのであった。凶暴なカイマンを捕え、馬乗りになった時のウォータトンの気分は高揚していたに違いない。

7. 『南米漫遊記』の評価

『南米漫遊記』が出版されたとき、大方の批評家はその内容に対して懐疑的であり、何箇所かの記述について嘲笑した。嘲笑の的になったのはナマケモノについての記述、毒蛇を扱う際に用いた方法についての説明、そしてとりわけウォータトンがカイマン(ワニ)の背にまたがった話である。市場性のある本を著しているナチュラルリストの一人スウェインソン (William Swainson) がウォータトンが無謀にも 'amateur naturalist' と呼んだので、ウォータトンは 'eccentric' と呼ばれた時と同じくひどく傷ついた⁶⁾。ウォータトンは野生状態にある生物を自分の目で観察し、従来行われてきた学者による記述内容を否定する場合もあったので、反撥を買ったのである。

ウォータトンはそれまで行われてきたナマケモノについての説明を次のように批判する。「もしも博物学者が荒野に入ってナマケモノの生息地や生態を調べて書くならば、間違った結論は引出さなかったであろう。他の四足動物と異なり…ナマケモノについては木にぶら下がっている時に観察して記述しなければならない⁷⁾と。そして先住民などが持ってきたようなナマケモノを見て書いた記述には間違いがあると言い、そうした誤りは誇張した記述をしようというような意図が少しでもあって書かれたのではなく、「ナマケモノが展示されるとは造物主が意図しなかった場所で、ナマケモノを調べることから必然的に生じたもの⁸⁾であろうと推測している。

批評家の中で唯一人例外であったのはスミス (Sydney Smith) である。彼はウォータトンの話の正確なことは全て受け入れ、ウォータトンの機知に富んだ考えの幾つかを支持した。それはナマケモノの行動、ブラジルボアについての記述であった。事実、『南米漫遊記』におけるウォータトンの記述は、その後彼の観察したことを調べるか、彼の

業績を真似た他の旅行者たちによって、最終的に全て疑いを晴らされた。

ウォータトンはことごとく自らの観察によって得た知見に基づいてのみ記述し、他人の言説は信用しなかった。ウォータトンが自叙伝の中で書いているように「この著作（『南米漫遊記』）のほとんどの部分は森の奥深い所で書かれたもので、本の助けは借りず、いかなるナチュラリストの助力も受けなかった⁹⁾」のである。

ウォータトンの調査は綿密で、忍耐強かったので、導き出す結論は正当なものであった。その結果、彼の調査した範囲内の自然誌は全く安心のおけるものであると、広く認められるようになった。彼の活動についての説明は全体的に飾り気なく、率直この上ない。その表現は単純明快で、非常に力強い。彼は自らの行為を美化することはなく、自分の勇気を自慢することもない。

ウォータトンは心が広く、彼の書いたことを非難攻撃した人を自宅に招いて、昔からの流儀に従って洗練された形で歓待し、友好的に議論をして論争点を解決した¹⁰⁾。

ウォータトンの欠点は動植物の科学的分類名、すなわち学名に対して偏見を抱いていたことである。学名は不必要にあいまいで術学的なものに見做し、例えば Hannaquoi（ヒメシャクケイ）、Houtou（ハチクイモドキ）、Camoudi（アナコンダ）、Crabier（ヒロハシサギ）、Maam（シギダチョウ）、Pi-pi-yo（カザリドリ）、Salempenta（テグートカゲ）のような地元での呼び名を用いているので、不明確で同定するのが難しく、理解し難い場合が少なくない。このような地方での名称は現地を訪れたことのないナチュラリストは勿論、一般の読者には到底理解できないものであろう。

しかし、学名はラテン語に基づいており、関係のあるギリシア語も現地語に比べれば多くの方が理解できる。もっとも、ウォータトンは学名を正当なものとする理由のあることは幾分か認めてはいた。『南米漫遊記』は今日まで種々のエディションで絶えることなく出版されてきたが、それはウォータトンのこの欠点を補うために、ふつう巻末に動植物の用語解説が付いているからであろう。もしそうでなければ、この興味深い『南米漫遊記』は謎に包まれた内容不可解の書となって、広く読者に迎えられることはなかったであろう。

8. 結 び

ウォータトンは子供の頃から自然に強い関心を抱いていた。南米のギアナを4回探検旅行し、体験、観察したことを『南米漫遊記』として出版した。ウォータトンは他人の言説を信じることなく、自らの目で綿密に、忍耐強く観察した事実に基づいて結論を導き出した。後半生は自然環境保護に力を注ぎ、広大な自宅の大庭園ウォルトン・パークをイギリス最初の人工バード・サンクチュアリーとして改造し、野鳥の保護、繁殖に努めた。

彼は信仰心に篤く、自然と協調するという宗教的感覚を基本的に持っていた。この感覚は、ギルバート・ホワイトおよび一般的に「古典」18世紀の穏やかで声高でない研究法と密接に結びついて、強められた。ホワイトは聖職者としてハンブシャーの村セル

ボーンで生涯のほとんどを過ごしたが、それとは著しく対照的な生涯を送った貴族のウォータンは、自然研究の面では自らの観察を重んじる野外の観察者として、ホワイトの流れを汲んでいたと言える。また、研究面でウォータンに異を唱えて攻撃的である人に対しても、彼はおおらかな心で接し、友好的に議論をして論争点を解決したのであった。

[註]

- 1) Wood, J. G., ed., *Waterton's Wanderings in South America* (Macmillan, 1885), pp. 35 f.
- 2) Sitwell, Edith, *The English Eccentrics* (Dennis Dobson, 1933), p. 285.
- 3) Edginton, Brian W., *Charles Waterton—A Biography* (Lutterworth Press, 1996), p. 3.
- 4) Edginton, Brian W., op. cit., p. 2.
- 5) Wood, J. G., op. cit., p. 23.
- 6) Edginton, Brian W., op. cit., p. 3.
- 7) Wood, J. G., op. cit., p. 215.
- 8) Ibid., p. 216.
- 9) Waterton, Charles, *Essays on Natural History* (Longman, 1838), Vol. 1, p. lxxviii.
- 10) Wood, J. G., op. cit., p. 23.

[その他の参考文献]

- Aldington, Richard, *The Strange Life of Charles Waterton* (Evans Brothers, 1949).
- Blackburn, Julia, *Charles Waterton : Traveller and Conservationist* (The Bodley Head, 1989).
- Hobson, Richard, *Charles Waterton : Home, Habits, and Handiwork* (Whittaker & Co.; Simpkin, Marshall, & Co., 1867).
- Key, John, *Eccentric Travellers* (John Murray and BBC Publications, 1982).
- Phelps, Gilbert, ed., *Charles Waterton's Wanderings in South America* (Charles Knight, 1973).

Abstract

Charles Waterton was born in 1782, at Walton Hall, West Riding near Wakefield, Yorkshire. From early childhood, he showed great powers of observation, love of nature and enterprise.

He made four journeys into Guiana, exploring the wilds, particularly the tropical rain forests, between 1812 and 1824. *Wanderings in South America* was published in 1825, most parts of which were written, based on his notes, in the depth of the forest without the help of books, or the aid of any naturalists. He had no trust in what other naturalists said. His observations were both patient and accurate.

Waterton was called an eccentric, but it is only in the sense, as Edith Sitwell says, that 'all great gentlemen are eccentric, by which I mean that their gestures are not born to fit the conventions or the cowardice of the crowd.'

In this paper, first, Waterton's eccentricities will be studied mainly through his acts in his younger days, and deeply religious life. Second, his study of nature will be examined with quotations from *Wanderings in South America*. Finally, it will be considered how and what he did in the conservation of nature to which he devoted himself during the latter half of his life.

Key words: Waterton, Charles

Wanderings in South America

natural history

Guiana